

イザヤ書の編集作業

越後屋 朗

(大学神学部助教授)

現在、私は主に二つのテーマについて研究している。一つは長年関心を持ち続けている「イザヤ書の編集作業」で、もう一つは五年ほど前から着手し始めた「カナンにおける古代イスラエルの成立から王国成立までの過程」である。後者はヘブライ語聖書学（旧約聖書学）において現在最もホットなテーマの一つである。ヨシユア記、士師記、サムエル記にカナン定着から王国成立までの経過が記されている。しかし、これらは史実を忠実に反映しているとは言いがたい。一体、史実はどうであったのか。この問題自体は古くから論じられてきたものであるが、史料としてのヘブライ語聖書の不十分さを補うために、社会学（広義の）などの分野の最新の研究成果を積極的に取り入れることによって、新たな説明が期待されている。

もう一つのテーマである「イザヤ書の

編集作業」については少し詳しく紹介したい。

イザヤ書は一―三九章、四〇―五五章、五六―六六章の三つに分けられ、各々の部分は一つのまとまりをなしているという仮説が広く受け入れられてきた。そこでイザヤ書研究は、第一イザヤ書研究、第二イザヤ書研究、第三イザヤ書研究という仕方で開催されてきた。しかしながら、これら三つの部分は偶然に結合された現在のイザヤ書になったとは考えにくい。なんらかの意図・目的に基づいて結合され、しかもその際イザヤ書全体にわたっていろいろな編集の手が加えられたのではないかと思われる。ここ二十年の間に発表された研究も、イザヤ書が編集上の統一であることを指摘しているものが多い。したがって最近では、イザヤ書の三つの部分のいずれを研究する場合にも、まず最初にイザヤ書全体が考察の対

象とされなければならない状況となっている。さらには、イザヤ書中の各々の部分が無関係に存在していたとは考えられないとする立場の研究も出てきた。

私はこれまで発表されてきた第一イザヤ書、第二イザヤ書、第三イザヤ書の編集史に関する研究を整理し、これらの研究内容をイザヤ書全体にわたる編集という観点から組み立て直そうと試みているところである。具体的には、イザヤ書全体の編集作業の分析にコンピュータの（単純／複合）検索手段を用いて、テキストのいろいろなレベルや単位においてイザヤ書を横断する関連性を見つけ出す作業を続けている。

この研究は、聖書学におけるコンピュータの効果的な使用方法を探る一つの試みでもあり、ヘブライ語聖書の中他のテキストにも適用できるような分析方法の確立を目指している。



電力系統のシミュレーション

長岡直人

(大学工学部助教)



私の学部出身学科は電子工学科、すなわち「弱電」を取り扱う分野であり、当時は電力を始めとする「強電」分野にはあまり興味がありませんでした。しかし電力工学は、発電所から家庭用コンセントに至るまで、更には情報処理等極めて幅広い分野をカバーする学問領域で、この分野を覗いてみると電力システムの深い奥行きに驚かされ、いつのまにかこの世界で生きて行くこととなりました。

電力系統は極めて大きいシステムで、簡単に実験を行って検証を行うことが困難です。例えば、長さ五〇キロメートルに及ぶ送電線の実験を容易に行い得ない事は明らかでしょう。そこで、主にコンピュータを用いたシミュレーションにより、電力システムの開発ならびに設計がなされております。私の研究テーマは、電気エネルギーの輸送すなわち、送電・配電に関わる分野のシミュレーション技

法の開発です。これにより、電力供給の安定化、低コスト化を目指しています。

具体的な研究テーマは、小生の性格ならびにこの分野特有の事情により、多岐にわたっておりますが、近年配電系統における高調波問題に興味を持っております。高調波は電力系統における「公害」であり、安定な電力供給を妨げる一つの要因です。高調波による障害は蛍光灯のちらつき等に見受けられますが、まれに火災や人身事故に至る場合もあります。これら高調波障害はインバータの普及によつて顕著となってきました。これはインバータによる省エネルギー化の代償です。従つて、一般家庭も少なからず公害の発生源となつていのです。また、多くの電気製品が一つの電力系統に接続されているため、大気汚染等の公害と比して、その発生源の調査ならびに対策が極めて困難であります。しかしながら、有

害物質が積算される一般の公害と異なり、発生源を特定すれば上手に系統を構成して、高調波を打ち消して、障害を低減することができ特徴があります。そこで、コンピュータシミュレーションの技法を用いて、発生源の推定ならびに対策の提案を行っております。僅かな情報の中から発生源を推定することは、極めて困難と言われておりますが、推理小説の探偵のような仕事で、なかなか面白い研究の一つです。まだまだ研究の緒に就いたばかりで、問題は山積しておりますが、一つ一つ解決して行く所存です。

音楽療法—こころを映す音との出会い

稲田雅美

(女子大学学芸学部助教授)



ここ数年来、心をリフレッシュする音楽とか、元気になる音楽といったCDが、音楽療法の名の下にさかんに出回っています。一方、臨床体系に織り込まれている音楽療法の、精神医学や臨床心理学の枠組みを借りながら独自の基盤を築きつつあります。この後者の、欧米で確立された近代音楽療法の、障害や病気をもつ

人びとに音や音楽をとおして心身の諸機能に働きかけるリハビリテーションの形態です。一般に、知的障害、身体障害、精神障害をもつ子どもや大人を対象にしています。最近では不登校に代表される、社会適応に困難をもつ人びとのケア、あるいは終末期医療など多方面にとり入れられています。

わたくしは、発達遅滞や自閉傾向の子どもたち、精神科の病院に入退院を繰り返す青年たち、あるいは生活に支障をきたす痴呆症状をもつ高齢者とともにセラ

ピストとして働いてきた経験を生かしながら、音楽がもつ力について考察をしています。

たとえば、ピアノの鍵盤に覆いかぶさるように身を投げ出して大きな音を発し、その音の響きが完全に消えるまでピアノによりかかったままじつと動かないT君。この自閉症児の行動はさまざまな角度から解釈できます。ひきこもりのひとつとして病理的に見ることもできますし、あるいは発達心理学や対象関係論の切り口から肯定的にとらえ、おかさんの暖かい胸から少しだけ離れて、自己を包み守るさやを彼自身でつくり始めていると考えることもできます。

また、話し合いをするをたいいてい主導権を握り、他の人の発言に無頓着な神経症のSさん。しかし、即興で合奏するときはいつも他の人より小さな楽器を選び、その上みんなにリズムを合わせるこ

とを考えすぎて一回も音を出せずに終わってしまったこともありました。この場面の中にはSさんのさまざまな不安が見え隠れする一方で、他者と関係をもつことに必死の努力をしていることも痛々しいほど伝わってきます。

音楽活動の中では、障害や疾病ゆえに現われる特徴的な反応と、病理の奥に埋もれて普段は見えないきわめて健康的な自我が、さまざまなかたちで浮かんできます。このようにわたくしの研究は、音楽のもつ豊かな表現性と、人間の精神的成長や成熟のプロセスの多様性を同時に考察するという、芸術的かつ実証的な色彩を呈するものとなっています。

性的少数者と性教育

小田切明徳

(中学校教諭)



一九九八年の五月、埼玉医科大学の性転換手術実施の見通しの報道がありました。M T F (male to female) の性転換者はカルーセル・麻紀で知られていましたが、今回はF T Mのニュースでした。

他方、政治家、企業家、研究者らの性的スキヤンダルは国境を越え、地域を問わずに起きています。例えば、女子高生を対象にした買春・援助交際やノーパンしゃぶしゃぶ、キャンパス・セクハラ(アカハラ)等の男の性逸脱の顕在化の報道です。性は下半身の事で口にするこさえ嫌らしいもの、性科学や性教育に携わる人は品性の低い者とされる状況は今も同じです。

生物の一員であるヒトも基本的には遺伝子情報から無縁ではありませんが、ヒトは巨大化した脳がつくる性文化に多大な反作用を受けます。こうしてヒトの性のあり方は多様で複雑化しています。だ

から、性の理解には多方面からの科学的アプローチが必要です。

一九二〇年代の同志社で山本宣治が「人生生物学」と言う講義で、他に先駆けた性教育を始めました。七十年経ても、人類は性から自由になれず、性の魔力に怯え続け、その暴走を恐れています。性の究明は徳育、倫理、宗教といった各人の価値観によりその方法が左右されます。ヒトの性行動はプライベートル故に、他の領域のように自由闊達な調査、議論ができません。

最近では、H I Vといった微生物により内側から、生環境ホルモンの外側から人類は生殖の危機に見舞われています。また、人権向上・男女平等・ボーダーレス社会の実現を求める運動の高まりを受けて、性のあり方は鋭く問われています。性自認や性指向を巡っては多くの人(性的少数者)は自分の性自認は明確であり、

性愛の対象が異性であることを当然のことと思っっています。だが今日、ゲイやレズビアン性の愛や性転換(T S)の存在を通して自己の性愛について、相対化を余儀なくされています。性的二型に馴らされた現代人は生物の世界では当たり前に存在している間性・インターセクシュアル(I S)を忘れ、文化的慣習により、自分の性とそのあり方のみが正しいと思っ込んでいます。私は八〇年代後半からの性科学の発展と性的少数者であるH I V感染者、T S、I Sの主張を学ぶことにより、性とは何か、性教育の核心は何かを教えられています。

(参照拙書、『エイズ予防から共生へ』、共著『インターセクシュアルの叫び』かがわ出版)